



古代の文房具

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 古代の文房具

紙及び墨の製法は、推古天皇 18 年 (610) に高句麗僧曇徴^{どんちよう}が伝えたと言われます。京都府宇治市^{はやあがりかわらがまあと}牟上り瓦窯跡や大阪府堺市^{すえむらこようせきぐん}陶邑古窯跡群、愛知県名古屋^{さなげかまあとぐん}市猿投窯跡群からは、7 世紀前半から半ば頃にかけての陶硯^{とうげん}（陶製の硯）が発見されており、その頃から硯・墨・紙の製作が広まっていったものと考えられます。また、初期の陶硯を焼いた窯跡からは仏教関連の容器も見つかっており、硯を使用する場所の一つとして寺院があったことを示すものです。福岡県では、大野城市^{うしくびかまあとぐん}牛頸窯跡群から 8 世紀代前半から半ば頃の陶硯が発見されており、大宰府に供給していたと考えられます。

硯は墨を研^する道具と言うことで、古くは「研」の文字を用いていましたが、後に同音の「硯」が用いられるようになりました。10 世紀中頃に書かれた『倭名類聚鈔』によると、研一須美須利と解説されています。また、10 世紀末から 11 世紀初めに書かれた『枕草子』や『源氏物語』では、「すゞり」と書いており、「すみすり（墨研り）」から「すゞり」へと転訛^{てんか}したことが窺えます。

「文房四宝」という言葉がありますが、筆・紙・硯・墨の文房具四品を指します。大宰府も筆や墨を製作

しており、兔毛筆 560 管・鹿毛筆 560 管の併せて 1120 管と墨 450 挺^{ちよう}を平城宮に納めています。使い古した筆・墨や余った紙は、基本的に返上する必要があり、厳しい管理下におかれており、文房具は大変貴重品だったことが判ります。また、下級役人のことを「刀筆の吏」とも言いますが、刀子^{とうす}（小刀）は木簡^{もつかん}に書いた文字を削るための道具で、現代の消しゴムの役目をします。刀子は筆とともに文書に係わる役人の必需品であり、ここから役人（吏）のことを「刀筆の吏」と呼ぶようになりました。

2 硯の種類

硯はその形態から何種類かに分けられます。円形の硯を円面硯^{えんめんげん}、方形の硯を方形硯、平面が「風」字の構えをしている硯を風字硯^{ふうじげん}、鳥・亀・獸・宝珠・八花などをかたどった硯を形象硯と名付けています。これら定まった形をもつ硯を定形硯と呼び、蓋・坏^{つぎ}・皿^{ぼん}・盤など日常使う土器や瓦を硯に転用したものを土器（瓦）転用硯と言います。須恵器の大甕や壺の破片を楕円形に打ち欠き、周囲を整形した土器転用硯を猿面硯^{ざるづらげん}と呼んでいますが、朱墨を擦ると硯が赤くなり、猿の赤い頬を連想させることから付いた名で、この猿面硯も土器転用硯の一種です。



古代の文房具 ※円面硯・水滴以外は複製品



さまざまな硯

また、円面硯には足（脚）が付きますが、足の形状や数により、三足・多足（足が5～6個付くもの）・^{ていきやく}獸脚・蹄脚（ひづめを模したもの）・^{けんそく}圈足（輪状の脚で、すかし孔を設けるもの）・無脚（足が付かないもの）に細分されています。硯の材質としては、陶製・石製・瓦転用のものがあり、古代においては陶製の硯が一般的で、石製のものは10世紀頃から使用され始めます。

なお、大宰府における陶硯総数に占める定形硯の割合は、政庁跡で17.2%、^{ふちよう}不丁官衙跡で11.0%と文書事務には主として転用硯が用いられたことが判ります。しかし、^{ひよし}日吉官衙跡では69.6%と定形硯の占める割合が高いのが特徴です。



大宰府史跡出土の木簡

3 文字の広がり

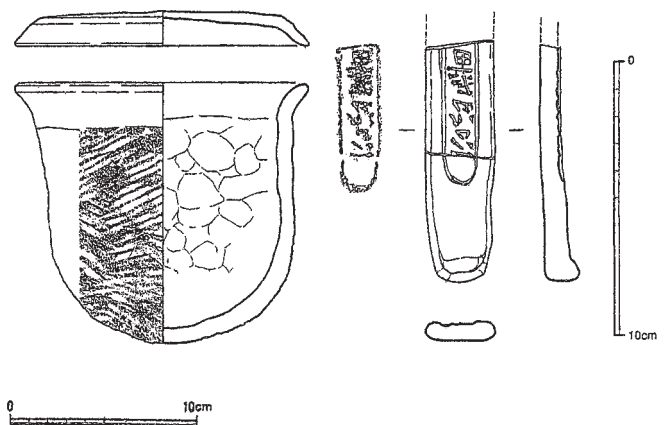
^{りつりようせい}律令制が制定・施行される以前は、専ら口頭による命令伝達が行われていましたが、それ以降は文書による行政がなされ、中央には二官八省が置かれ、地方には国郡里制による地方官制がしかれ、律令制が厳格に施行されました。紙は特に貴重品であったため命令伝達の手段として用いられるのが木簡で、文字を書くための道具が硯・墨などの文房具となります。

大宰府跡や^{かんが}観世音寺などの官衙（役所）・寺院から木簡・墨書土器・硯が発見されるのは当たり前のことですが、一般的な集落跡からも定形硯・転用硯や墨書土器・刻書土器が見つかることが希にあります。その様な集落は、^{せきたい}転用硯・墨書土器以外に石帯（帯の飾りに付けた石製品）、^{りちよう}緑釉陶器、製塩土器などの特殊品も見つかることが多く、^{りちよう}末端官吏である里長によって管理されていた集落と考えられ、文字に関する資料の存在から里長は識字者とみられます。文字の広がりに関しては、当時一級の知識人であった僧侶の関わりが考えられ、仏教の広がりとともに文字も広がっていったものと思われます。

なお、福岡県みやこ町徳永川ノ上遺跡からは、小甕の中から「^{からすみ}□墨忍足」銘のある唐墨が見つかり、^{たいぼん}胎盤などを納めた^{えなつぼ}胞衣壺と考えられています。新生児が上級官人になることを願って埋納した親心が偲べれます。（学芸調査室 小田和利）



徳永川ノ上遺跡出土の胞衣壺・唐墨



徳永川ノ上遺跡出土の胞衣壺と唐墨実測図



編集 発行：平成23年3月31日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>